

名古屋大学におけるフューチャー・アース研究の最前線

2018年3月12日(月) 13:30-17:40

ES 総合館一階会議室

趣旨説明 環境学研究科長 岡本耕平



・4月1日から名古屋大学にフューチャー・アース研究センターが発足する。フューチャー・アースとは持続可能な地球社会の実現をめざす国際共同研究プラットフォームであり、人類社会が直面する地球環境問題に対処していくためには、異なる分野の研究者が学際的に研究を行うだけでなく、市民、行政、企業などの社会のステークホルダーとともに「超学際的」に研究を進めていく必要がある。名古屋大学では、これまでもこうした理念と重なる研究に取り組んできた。個々の研究事例について話題提供をいただくとともに、後半のレクチャーでは、日本、

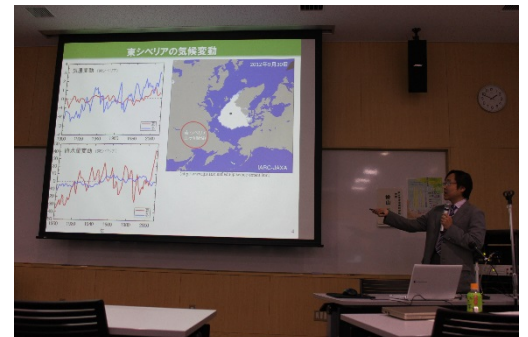
世界のフューチャー・アース研究の状況はどうなっているか、そうした枠組みのなかで、どう取り組んでいくべきかについて、ご講演いただく。

話題提供

1. 「東シベリアとモンゴルにおける永久凍土保全に向けた超学際研究」

宇宙地球環境研究所 教授 檜山哲哉

・地球規模の気候変動は、水循環の変化を伴いながら、東シベリアやモンゴルの地表層(植生や永久凍土)に影響を及ぼしている。2010年以降、東シベリアとモンゴルの水循環を降水、植生、永久凍土、河川流量の観点から包括的に捉えると同時に、そこに生活する人々がどう適応していったらいいのかという課題も含めて学際・超学際的に研究してきた。タイガ林を伐採して開墾した耕作地がソ連崩壊によって放棄地となり、永久凍土の荒廃が目立ちはじめた。凍土保全策を現地生活者と共創する必要がある。



2. 「臨床環境学の挑戦」

環境学研究科 教授 高野雅夫



・持続可能な社会を目指すために、個別分野の中の環境への取り組みや学会動向からの問題設定では、現場の役に立たないことが分かってきた。研究者が問題設定するのではなく、現場の問題からスタートして、診断から処方・治療までを一貫して責任を持って行い、持続可能な地域づくりに直接貢献できる臨床環境学という考え方を多分野の研究者で提唱し、本にまとめた。持続的共発展教育研究センターが取り組んだ臨床環境学研究の実践例として、設楽町地方創生への支援、ブラザー工業の郡上の森のプロジェクト、天白区市営住宅の高齢化対策、

ヨーロッパ委員会の都市間連携プロジェクトを挙げた。

3. 「森と町の未来を作る地域間連携プロジェクト - 都市の木質化プロジェクト -」

生命農学研究科 准教授 山崎真理子

・日本の森林は、人工林が多く、林業の担い手不足のため、荒廃している。日本の年間の木材需要は、国内で育っている量でまかなえるが、利用されていない。一方都市は人口集中しているが、中心部では居住者がおらず、都市機能が低下しているという問題点がある。都市での木材利用を考えるため、錦2丁目で、都市の木質化プロジェクトをはじめた。町の人たち自身が何に木材を使うのか、意見を出し合い、最初はウッドデッキを作り、コインパーキングに置いた。最近では、豊田の山間地で長者町の森をつくるなど森と町がつながる活動も広がっている。



4. 「SDGs と国際開発」国際開発研究科長 伊東早苗



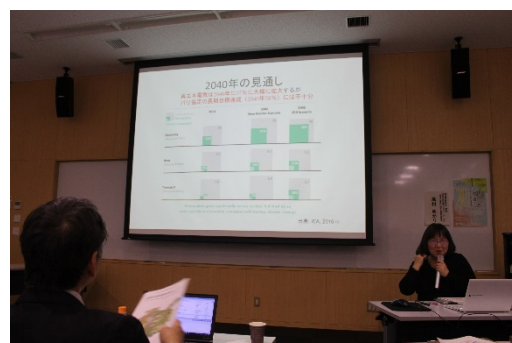
・開発目標とは国際社会がよりよい社会を目指して一体となって取り組むべき国際的、社会的政策的な目標である。1990-2015年のミレニアム開発目標（MDGs）では貧困の削減という社会的な問題に重点が置かれていたが、2016年からの持続可能な開発目標（SDGs）では、環境の比重が大きくなり、経済と社会と環境のバランスが重視された開発目標となった。

キーノート・レクチャー

「パリ協定の実施と脱炭素化に向けた政策ニーズと研究課題」

環境学研究科 教授 高村ゆかり

・パリ協定で地球の温度上昇を1.5°C以内に抑える努力目標が設定され、脱炭素社会を目指した動きが活発化している。主にエネルギー効率の上昇と再生可能エネルギーの普及により、世界のエネルギー消費は減っているが、2°C以内の目標には不十分であり、うまく政策を作る必要がある。研究者は、トランスディシプリナリー（超学際的）な研究を通して、気候システムの解明や住民への影響評価、合意形成等で政策作成に貢献できる。



ゲスト・レクチャー

「Future Earthは何をめざしているか」

総合地球環境学研究所長 フューチャー・アース科学委員会委員 安成哲三



・1750年-2000年、人間活動が右肩上がりに急激に上昇してきたのに伴い、環境の指標は極端に悪化してきた。人類世というべき特異な時代になっており、地球システムの限界が来ている。環境問題には多くの要因がお互いに絡んでおり、超学際的な研究が求められる。フューチャー・アースは、自然科学、人文科学、工学、農学分野の科学統合、社会との共創と共有、超学際的な研究を行い、地球環境変化のリスクを回避・軽減するための知を提供することを目指している。2017年秋に日本委員会が設立された。日本にはアジアでのリーダー

シップ、自然災害と関連した研究活動、アジアの文化・価値観の多様性を活かした活動などが求められる。名古屋大学は、社会との連携を考えた超学際的な研究に既に着手しており、先進的であると感じた。